

	<b>NPO 法人 京都観光文化を考える会</b> <b>都草だより</b>	第80号
		発行人：小松香織
		編集人：相場まり子
		発行所：京都市上京区 下立売通新町西入 京都府庁日本館2階
		電話：075-451-8146

## ■ 年頭によせて



謹んで新年のお慶びを申し上げます。さて顧問の井上満郎先生が、かつて都草会員へ向けて「自らの社会化」というお話をされたことがあり、大きな感銘を受けたことを覚えています。ITによる個人発信ができる時代とはいうものの、そう容易ではないリアルな「自らの社会化」。それが都草の活動を通して実現することができる！まさに、ここに都草の大きなパーパス（存在意義）があるのではないのでしょうか。

また都草そのものも、成熟した NPO 法人として、会員の皆様と共に「社会化」へ向けた努力を積み重ねていくことが必要だと思います。具体的なビジョンとして、本年は 2 件の事業を推進する予定でございます。一つは都草ホームページの会員アクセスの半数以上がスマートフォンであることをふまえたホームページのスマートフォン対応化です。閲覧・操作のしづらさを解消するなど、会員はもとより、外部閲覧者の利便性を計り、社会との繋がりを広げます。

次に、NPO 法人としての社会的な役割を果たすという観点から「京都御所・御苑歴史散策ガイドツアー10周年記念」の講演会と特別御苑ツアーを、環境省はじめ他団体の協力を得ながら実施します（いずれも来期の事業計画に盛り込む予定です）。日常生活も徐々に戻りつつある今、会員数も再び 400 名（1 月 1 日現在）を超えました。「自らの社会化」の実践と、都草のさらなる発展をめざして皆様と共に邁進してまいる所存です。本年もご指導ご協力の程よろしくお願い申し上げます。（理事長 小松 香織）

## ■ 第 13 回 都草講演会「藤原道長と紫式部」



12 月 17 日（日）午後 2 時より、歴彩館大ホールにて臈谷寿先生（同志社女子大学名誉教授）による「藤原道長と紫式部」の講演会が行われました。この日は寒波の到来にもかかわらず、会場の大ホールは約 300 名の参加者で大盛況でした。

初めに「次の大河ドラマの『光る君へ』とは誰のことでしょうか？」と私たちに疑問を投げかけられたので、これから始まる大河ドラマへの期待をふくらませながら講演を伺しました。

まず、道長の妻女と天皇家についての家系図の説明から、道長がどのようにして天皇家と結びついたか、次に紫式部の誕生から結婚、中宮彰子への出仕、死去までを資料を紐解きながら、ユーモア溢れる語り口で難解な資料を私たちにわかるようにお話しされました。道長が権力の中枢に上り詰めた背景や様子を『紫式部日記』や『小右記』、和歌などの引用も現代風に説明していただき、とても理解しやすく思いました。

特に『紫式部日記』における道長の孫の誕生の記述では、その状況が生き生きと描かれています。道長の記した『御堂関白記』にはその歎びが「踊るような字」で書かれていることを説明され、もう一度ゆっくり鑑賞してみたいと、次に一般公開される時が待ち遠しくなりました。

『源氏物語』は道長の存在なくして完成しなかったことが納得いきましたし、平安貴族の官位制度や複雑な任官制度、当時の慣習などの説明では知らなかったことがたくさんあり、NHK の大河ドラマでは視覚的にどのように描かれるか楽しみです。（会員 西條 貴子）

## ■ 深い内容と幅広い視点が魅力の「歴史探訪会」



2022年の秋から、「歴史探訪会」の東部会のメンバーとして活動することになりました。以前から他の団体などが主宰する町歩きツアーなどに参加したことはありますが、「歴探」のツアーは特別。それは内容の深さです。参加される方が「都草」の会員であり、すでに京都について多くの知識をお持ちです。そんな参加者に楽しんでいただくため準備も実に綿密。決定したテーマの現地に2回ほど足を運び、案内する内容やコースをチェック。ツアーがスムーズに進むように分単位でスケジュールを確認。初めて参加した時、正直、「ここまでやるの～、う～これは大変…！」と思いました。中心となるメンバーの方の熱意に圧倒されます。

実際に初めて参加者を案内したのは、2023年初夏の「東福寺」。境内の見どころを次々案内。ガイドブックでは知りえない内容も多数あり、参加者の関心を深めます。観光客を対象にした町歩きツアーとは内容の濃さが違う！ 多くの方のご参加を期待すると共に、今後も先輩メンバーの皆さんにご指導を賜りながら参加させていただけたらと思うばかりです。

私自身を含め、メンバーの高齢化が懸念される場所。そのためコースは、段差が少ない歩きやすい場所を選んだり、時間の短縮なども考慮される方向に。さらにより若い世代のメンバーの参加が強く求められます。これからの魅力的な「歴史探訪会」を持続させるために。(会員 小原 誉子)

## ■ 京都御苑の名木をガイド



京都御苑は、明治時代の初めに、この辺りにあった多くの公家屋敷が空き家となり、取り壊して苑地に整備されたものです。しかし屋敷にあった樹木はそのまま残っていたり、その後植え継がれ今も見られ、自然豊かな京都御苑の景観をつくり出しています。

御苑研究会では、11月21日に府立植物園で活動しているボランティア団体「なからぎの会」のご要望に応じて、同会会員約70名に対して京都御苑の名木を中心に歴史の話を交えながら、我々メンバー4人で案内しました。

九條邸跡にあった黒木の梅では、豪華な花が満開のころの写真を見ていただきながら、九條夙子(あさこ)(のち孝明天皇の後)が幼少のころ、邸内でこの梅を愛でられたというエピソードを紹介して当時をしのんでもらいました。また、閑院宮邸跡の塀の東側にムクロジがあります。かつては邸内にあった老木ですが、ここでは花の時期や秋にできる実の写真によってこの木の魅力を知ってもらいました。

凝華洞(ぎょうかどう)の松や、蛤御門の東にある清水谷家の椋(むく)は禁門の変以前からある巨木です。ここでは禁門の変を説明をして当時に思いを馳せてもらいました。

中立売御門の東にある車還桜(くるまがえしのさくら)は後水尾天皇があまりの美しさに車を引き返させたという八重の里桜です。また近衛邸跡にある桜は孝明天皇が感銘を受けた糸桜(シダレザクラ)です。桜は寿命が短いため植え継がれています。これらの桜も満開のときの光景の写真を見ていただいて、当時の様子を思い浮かべてもらいました。

その他ここに書ききれない名木もたくさんあり、参加された皆さんに楽しんでいただきました。今回は花の時期でなくて残念でした。

機会があれば、こんどは花の時期と一緒に歩いて楽しみたいと思いました。(会員 岡本 正二)